

蓮如の研究

——信仰構造について——

山崎 龍 明

一

親鸞は蓮如を通して語られすぎてはいないか。また蓮如について語られるとき、それを親鸞の実像ととり誤まることになかったか。すくなくとも、親鸞と蓮如の間にはかなりの経庭があるにもかかわらず、その異質性に立脚しての論考がすくなくたように考えられる。親鸞と蓮如を全く同一の信仰構造として把え、異質でありうるはずがないといった心情論的な蓮如論はべつとしても、かなり一般的とも考えられる立場に立脚して蓮如論を展開する人々の中にも、それがみられる。いま、ひとつだけ、それを記そう。「親鸞の教団は蓮如が生まれなかったならば精神上の出来事にはならなかったろう。（中略）あの多くの御文からうかがわれる蓮如の宗教は親鸞の本質を右のごとくみるかぎり親鸞をよく生かし、その線上に立つものである」。伝統的な親鸞理解、蓮如理解に

立脚する人々だけではなく、歴史家のなかにもこのような蓮如論を展開する人は多い。つまり、蓮如は親鸞の延長線上に厳然と位置するという蓮如論である。

当小論では、蓮如における信仰構造の基本的立場がどのようなものであったのか、という視点に基づいて若干の論考を試みたい。

二

蓮如の信仰構造における基本的立場については、次の三つに要約することができる。

- 一、無常説（無常美感）の強調
- 二、後世観念（極楽往生説）の積極的普及
- 三、女人往生思想の力説

周知の通り蓮如は親鸞的正統を極力強調した。『御文』八十通（帖内）を概観してもそれは随所にみられる。たとえば「当

流親鸞聖人の一義は「親鸞聖人の一流にをひては」の語あるいはそれに類する言葉が多くみられる。蓮如にとって親鸞的正統とは、言葉をかえていえば「本願寺教団」の正統性にほかならなかつた。したがって「一流の語は、一八例、一四通にみえ、当流の語は、九九例、四四通にみえる。一流または当流の語を含むもの、五〇通にのぼる⁽³⁾」のである。言うまでもなくその「当流意識」（正統意識）は「本願寺教団」とりまく「異端」的教説を意識しての語であることは言を俟たないが、そこにも蓮如の熾烈な教団意識があらわれている。

しかし、この点に配慮して蓮如には自己が担うべき「本願寺教団」があり、親鸞にはそれがなかつた、として両者の異質性を集約してしまふならば、あまりにも短絡的であるといわねばならない。それは時代背景といった問題に帰せられるべき事柄ではなく、むしろ信仰（思想）そのものの問題として、思想の質の問題として問われなければならないであろう。さきに記した蓮如の信仰構造の三点の要約が正鵠を得たものとして容認されるとするならば、それを親鸞の信仰構造と同列視することは不可能なはずである。なぜなら結論的ないい方になるが親鸞の信仰構造は決して、「無常説の強調」でもなく「後世観念（極楽往生説）の普及」でもなかつたからである。しかし、当小論では親鸞と蓮如の信仰構造の異質

性を論及するのが直接的な目的ではない。蓮如の信仰構造を探究するのが主眼であるから、まづそれから開始しなければなるまい。尚、蓮如の信仰構造についてみるにあたり、その対象としては第一資料とも目される『御文』を中心としてみていきたい。原則として帖内八十通を中心とするが、適宜帖外御文も参照していきたい。

（御文を帖内、帖外に分けて考える思考法については議論があるが、ここでは省略せざるを得ない。）

当小論では蓮如の信仰構造における第一の問題「無常説」について若干の考察を試みよう。蓮如の御文を通じて「無常」が説示されているのは、

- 文明四年、帖外16
- 〃 五年、1の6、1の10、1の11、2の1、帖外26、28
- 〃 六年、2の5、2の7、3の4
- 〃 七年、帖外45
- 〃 八年、帖外47
- 〃 九年、4の2、4の4
- 〃 十年、帖外56、57、
- 〃 十一年、帖外6
- 延徳二年、帖外77
- 明応六年、帖外96
- 〃 七年、4の13

等々が年次の記されているものである。年時不詳のものは

5の16、帖外一一五、一一九、一二五、一二八、等々にみるこ
とができる。尚詳細にみれば増大するであろうが、一応右の
ごときものに「無常」を取取することが出来る(この項に關
しては、石崎達二「蓮師無常の化風に就いて」『宗学研究特輯号』
昭和七年刊所収のすぐれた論文を参照)

数多い「無常」の説示のなか、これを整理すれば「無常の
風」「電光朝露」「ゆめまぼろし」「独去の意」「浮生」「あだ
なる」「盛者必衰」「水上の泡」「風前の燈」「芭蕉の葉」「お
くれさきだつ」「はかなき」「いたづらにあかしくらす」「つ
れなき」「不定」「白骨」、といったことになるが、これらの
説示が室町時代の民衆に有効な説得力となつて、真宗信仰が
浸透していったのである。

蓮如の御文のなかでも著名なものをいくつかあげるなら、
たとえば「それおもんみれば、人間はたゞ電光朝露のゆめま
ぼろしのあひだのたのしみぞかし。たとひまた栄華榮耀にふ
けりて、おもふさまのことなりといふとも、それはたゞ五十
年乃至百年のうちのことなり。もしたゞいまも無常のかぜき
たりてさそひなば、いかなる病苦にあひてかむなしくなりな
んや。まことに死せんときは、かねてたのみをきつる妻子も
財宝も、わが身にはひとつもあひそふことあるべからず。さ
れば死出の山路のすゑ三塗の大河をばたゞひとりこそゆきな
んずれ」(文明五年九月下旬)。「人界の生はわずかに一旦の浮

生なり、後生は永生の樂界なり。たとひまた榮花にほこり榮
耀にあまるといふとも盛者必衰會者定離のならひなれば、ひ
さしくたもつべきにあらず。たゞ五十年、百年のあひだのこ
となり。それも老少不定ときくときは、まことにもてたのみ
すくなし」(文明六年三月三日清書之)。といったものがある
が、このほか「上は大聖世尊よりはじめて下は惡逆の提婆に
いたるまで、のがれがたきは無常なり」(文明六年八月十八日)
「この世界のならひは老少不定にして電光朝露のあだなる身
なれば、いまも無常のかぜきたらんことをばしらぬ躰にて」
(文明九年九月十七日)「今日までは無常のはげしき風にもさ
そはれずして、我身ありがほの躰をつらく案ずるに、ただ
ゆめのごとし、まぼろしのごとし」(文明九年十二月二日)。
これに類する蓮如の語を詳細にあげればきりが無いほどで
あるが、ここではこの辺りにして、特に著名な、例の「白骨
の御文」に着目してみよう。

三

夫人間の浮生なる相をつらく観するに、おほよそはかなきも
は、この世の始中終まぼろしのごとくなる一期なり。さればいま
だ万歳の人身をうけたりといふ事をきかず、一生すぎやすすしいま
にいたりてたれか百年の形躰をたもつべきや我やさき人やさき、
けふともしらず、あすともしらず、をくれさきだつ人はもとのし

づく、すゑの露よりもしげしといへり、されば朝には紅顔ありて夕には白骨となる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちにとぢ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく變じて桃李のよそほひをうしなひぬるときは、六親眷屬あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外にをくりて夜半のけふりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あはれといふも中々をろかなり。されば人間のはかなき事は老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿彌陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏まうすべきものなり。あなかしこ。

引文がながくなつたが、右の蓮如書簡（法語）は彼の信仰構造の中核とも目される「無常」の代表的な説示であるといつてもよい。

蓮如の「無常」美感については、その背景があることはすでに指摘されている。たとえば、存覚の『存覚法語』がそのひとつである。『存覚法語』によれば、阿彌陀如来が深重の本願を起こし、殊妙の国土をもうけるのは「無常輪」「不淨輪」「苦輪」の三輪を度脱せんがためであると言う。以上の筆法にもとづいて存覚は「無常輪」について述べ「無常輪といふは、この世のなかのさだめなくはかなきありさまなり（中略）愛欲榮華つねにたもつべからず、みなまきに別離すべし（中略）漢李、唐楊のたほやかなりしすがたも一聚

のちりとなりぬ。付法蔵の賢聖もことごとくかくれぬ。有智高行の聖人もかたざらぬは無常の殺鬼なり。老少不定のさかひなれば、さかりなるひともおほくゆく。生者必滅のことはりなれば、おひぬるひとはましてとどまらず。鳥部山のけぶり、みねにもものぼり、ふもにもたつ、われもいつかそのかずにいらん。あだし野の露、あしたにもきえ、ゆふべにもおつ、たれとてよそにやはおもうべき」と「無常」の実相を示している。

次下に存覚は後鳥羽上皇の『無常講式』を「宸襟をいたましめ浮生を觀じましける御くちずさみにつくらせたまひける『無常講の式』こそ、さしあたりたることはり耳ぢかにてよにあはれにきこえ侍るめれ」といつた注釈のもとに引文している。

おほよそはかなきものはひとの始中終、まぼろしのごとくなるは一期のすぐるほどなり。三界無常なり、いにしへよりいまだ万歳の人身あることをきかず、一生すぎやすし。いまにありてたれか百年の形体をたもつべきや、われやさき人やさき、けふともしらず、あすともしらず、をくれさきだつひとは、もとのしづくすゑのつゆよりもしげし

このあと『愚迷発心集』『坐禅三昧経』（取意）によって「無常」の意を示し、『大般涅槃経』に基底しては「一切のものゝの世間に生あるものはみな死に帰す、寿命无量なりとい

へどもかならずをはりつくることあり、それさかんなるものはかならずおとろふることあり、あひあふものは別離することあり」と述べて「無常のかなしみは浄土にあらずばのがれがたく、この有待のすがたは生死をはなれずばいかでかあらためん」という注釈を加えて「無常輪」を結んでいる。

因みに『無常講式』の原文では「凡無^レ墓、人始中終如^レ幻者、一朝過程。三界無常也。自^レ古未^レ聞^レ有^レ三万歳人身。一生易^レ過。在^レ今唯保^レ百年形骸。実我前人前、不^レ知^レ今日不^レ知^レ明日。後先人繁^レ本滴末露」とある。蓮如の「白骨の御文」が『無常講式』を承けたものであるという指摘はすでに道隱の『御文明燈鈔』にみえる。

目崎徳衛氏も「蓮如はむしろ直接『無常講式』を参照したかとも考えられる。現代に至るまで真宗門徒を無常の思いに力強く誘いこんだ、あの『御文』のさわりは、実に後鳥羽院のつくるどころであった」と指摘している。しかしながら、特に論理的根拠は説示されていない。

ここで蓮如の『白骨の御文』と『存覚法語』と『無常講式』の三者を簡単に比較すると、蓮如は『存覚法語』の文に

① 夫人間の浮生なる相をつらく観ずるに

② されば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり、すでに無常の風きたりぬれば、すなはち

③ 六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべ

からず。さてしもあるべき事ならねばとて、そのこれりあはれといふも中々をろかなり。されば人間のはかなき事は老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏まうすべきものなりあなかしこく

の文言を加えたのである。ここには、蓮如の無常第一主義がある。つまり「不浄輪」下に存覚が示した「白骨」の具体的説示である「紅顔さらに変じて桃李のよそほひをうしなひぬれば、たちまちに降眼爛壞のすがたとなり」といったものも、すべて無常に結帰している。ここに蓮如の特徴のひとつがあるといつてよい。

したがって、蓮如のこの書簡を通じて言えることは、全面的に『存覚法語』を承けつつ、蓮如なりの日常的な表現を加えて成立したものとみることができる。さきの「朝には紅顔ありて」の語も、すでに指摘された通り『和漢朗詠集』に収められる「朝有^レ紅顔^レ誇^レ世路^レ暮為^レ白骨^レ朽^レ郊原^レ、義孝少将^レといった詩を踏襲しつつ蓮如的な表現がとられたといえよう。蓮如の『白骨の御文』が「直接『無常講式』を参照した」と規定するかぎり、その根拠が明確に示されなければならぬ。と同時に両者の思想的関連性といった側面からも考察が加えられるべきである。しかし、そのことを問うのがこの主眼ではない。

冒頭に記した蓮如の信仰構造のうち「無常」に関して略述してきた。蓮如の「無常説」は、蓮如の信仰構造において不可欠な視点であることは言うまでもない。さきに一言した通り『存覚法語』の「無常、不浄、苦」の三輪をすべて「無常輪」に結集させたことにもそのことは示されている。しかも、蓮如の「無常」が存覚のそれを承けつつ飛躍的に再製産され、真宗信仰の核心になっていったのである。冒頭に示した蓮如の信仰構造中の第三点、「女人往生」思想も、多分に存覚の『女人往生聞書』を承けている。以下、蓮如の信仰構造を「後世観念」「女人往生」の順で考察して蓮如像を把握、親鸞の信仰構造から導きだされた親鸞像との対比的考察を試みたい。(未完)

- 1 拙稿「親鸞と蓮如の宗教状況について」(『国家と仏教』3所収)。
- 2 井上光貞著『日本古代仏教の展開』217頁。
- 3 出雲路修校注蓮如『御ふみ』372頁。
- 4 『大日本資料』五の十一。
- 5 『真宗叢書』十巻所収。
- 6 『春秋』79年5月号、目崎徳衛氏の所説はきわめてかぎられたスペースのそれでもあるので無理がないとも考えられるが、「直接、『無常講式』を参照」(傍点筆者)とあるので気にかかるところである。

7 『和漢朗詠集』(『古典文学大系』七十三巻255頁)もつともこの

蓮如の研究(山崎)

詩は『源平盛衰記』、『曾我物語』、等々にも引用され、盛に愛誦されたものであることが石崎達二氏の指摘にある(『宗学研究』特輯号、昭和七年)。

8 「而して蓮師が、かく存師を相承しつづ己証を發揮された所以は、恐らく苦不浄は観法に乱ずる恐れがあるから、これを退けられたのであろう。そしてこれが對他与奮門の存師と自宗相承門の蓮師との相違である。されば蓮師が「仏教は無我にて候」と仰せられても、それは観法ではなく実感であり、嗜みである如く無常も決して観法ではないのである」(前掲石崎論文208頁)という指摘がある。

9 蓮如の無常観は必然的に来世主義に傾斜していくが、当時の民衆にとつてきわめて有効な説得力をもつものであった。それは戦乱の世であつてみれば当然である。この世が「夢、まぼろしの世」であるのに対し、来世こそ「永生の楽果」を得るところであつたからである。本願寺教団再興の思想的基底はこの辺りにあつたといつてもよい。

10 「女人の出離はことにこの教の肝心なり(中略)別して女人往生の願をおこしたまへるは、ことに諸仏の済度にもれたる重障をあはれみ、十方の浄土にさらはれたる極悪をたすけんとなり」(『存覚法語』)。

※テキストは『蓮如、一向一揆』『真宗聖教全書』『蓮如上人遺文』等を用いた。頁数省略。詳しくは『武蔵野女子大学紀要』19号に執筆の予定。(武蔵野女子短期大学講師)